

明治期のレース用自転車「ラージ号」(1907年頃)



日本での自転車レースは明治28年7月、アメリカ独立記念祭として横浜の外国人居留地で行われたのが記録に残る最初ようです。自転車競走会として正式の記録が残る最初の大会は明治31年11月に上野不忍池畔で開催された「内外連合自転車競走運動会」です。外国人を含め約500名の選手により、各種距離によるスピード競争のほか子どもレース、提灯レースなども行われ、最後のメインレースである20マイル競走では鶴田勝三が外国人勢をおさえて見事優勝しました。2組の音楽隊が会場を盛り上げ、観覧席は満員札止めの盛況でした。これを契機に自転車競走会が全国各地の練兵場や公園などで開かれるようになり、どこでも大変な人気を呼びました。

この競走会で使われた自転車は主にアメリカやイギリスからの輸入車でした。輸入を扱う貿易商社は大会で優勝した選手名と共にその選手が乗った自転車名を宣伝として使いました。この宣伝効果は大きく、貿易商社はこぞって選手を養成しました。そのなかでも小宮山長造はトップレーサーで、競走会の開催が決まると小宮山が所属する商社は彼が乗る自転車を多数見込注文し、実際に優勝することで売りつくしたといわれています。

明治39年ころから新聞各社は長距離ロードレースを主催するようになり、記事として大きく取り上げることで、競走会で行われるトラックレースと合わせて自転車レースはさらに盛り上がっていきました。

写真の「ラージ号」自転車は値段は、公務員の初任給が50円の時200円から300円もしましたが、イギリスの皇室名「英国皇帝エドワード陛下御乗用」などを前面に出して、高価格であるが故に高級車であることをアピールしました。

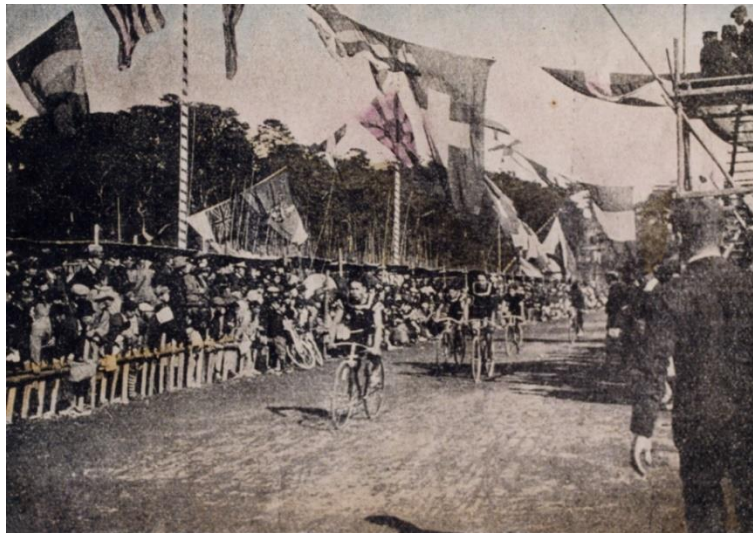


小宮山長造 (生没年不詳)

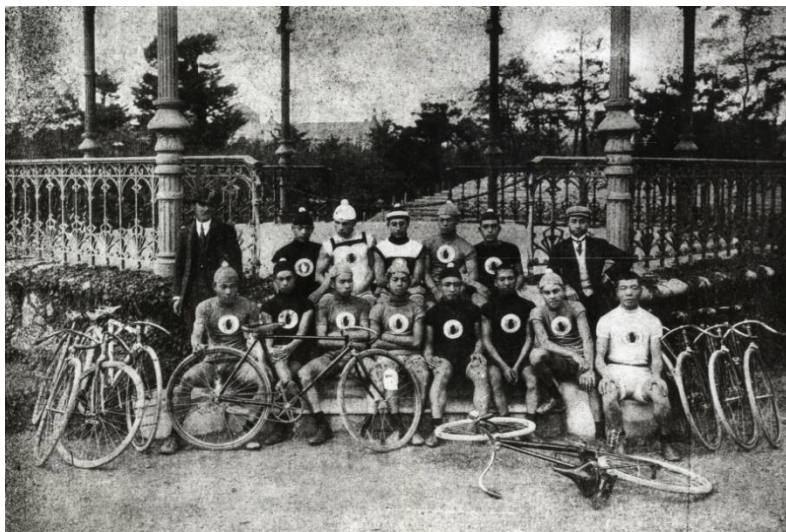
17歳のとき東京新宿で行われた競走会に初めて参加して優勝。その後貿易商社に入り、商社が輸入した自転車に乗って各種競走会で優勝を重ねていくなど、セミプロ選手第1号であった。



内外連合自転車競走運動会ではスピードを競う本来のレースのほか、子ども競争、仮装競争、傘競争、提灯競争など余興ともいえるレースも行われ、会場は大きな盛り上がりを見せた。(明治31年12月発行の風俗画報第178号)



上野不忍池畔では自転車レースの大会が度々開催されたが、コースには万国旗がはためき、大観衆に包まれた中でレースが繰り広げられた。



上野不忍池畔に集合した「ラージ号」自転車に乗った選手たち。彼らは「ラージ号」を輸入した貿易商社の販売促進のための期待を一身に背負っていた。